



# 私達の地球を少し冷やそう

第51回

## CO<sub>2</sub>危機、気候も「極端現象」 3月に横浜でIPCC総会

財団法人 地球・人間環境フォーラム専務理事 **平野 喬**

地球の温暖化が人間の活動によって年々進んでいるのに、人々の関心は年々薄れていると、この欄で何回か書かせて頂きました。温暖化が止まっていないのならば喜ばしいのですが、そうでないことを広く世界に発信する重要な会議、気候変動政府間パネル（IPCC）の総会が、日本で初めて、3月25日から29日まで横浜市で開かれます。

IPCCは地球の温暖化など気候変動問題と取り組む国連の機関で、世界中で発表された研究論文を収集し、一流の研究者が科学的な検証を行い、国連総長をはじめとする各国の政府首脳など政策決定者向けに評価報告書として提出しています。これまで4次にわたって発表しており、横浜で行われる総会では、6年ぶりに第5次の評価報告書が発表・承認されます。

IPCCには3つの作業部会があり、横浜で発表・承認されるのは第二作業部会の報告書で、気候変動による影響、地球の脆弱性、リスクに対する適応策などの、最新で最も信頼性のある内容と一言われています。気候変動問題に関しては、気候変動防止を目的とした国際条約の加盟国会議が毎年開かれています。各国が科学的交渉のベースにしていくのはほとんどIPCC

遅くなっていく京都の紅葉日  
(龍谷大学経済学部・増田啓子教授提供)

1996年	11月28日
1998年	11月30日
2000年	12月10日
2002年	11月21日
2004年	12月 2日
2006年	12月 7日
2008年	12月 5日
2010年	12月13日
2011年	12月14日
2012年	12月 7日

### 桜の開花、1週間早まる

IPCCの報告書に拠っています。私どもの財団では、IPCCの横浜会議を何とか盛り上げようと、昨年の秋から今年にかけて、横浜、京都、松山、仙台の4か所で、「気候変動の身近な影響」と題してシンポジウムを重ねてきました。多くの科学者、研究者からショッキングなお話も伺いましたので紹介しましょう。会議の当地となる横浜では、温室効果ガスのCO<sub>2</sub>（二酸化炭素）濃度が昨年世界の観測地点で400ppmを超えたことが紹介されました。産業革命前に比べ、世界の平均気温を2℃以上にならない、そのためにはCO<sub>2</sub>を450ppm以下に抑える必要があるというのは世界の共通認識ですが、将来、その実現が危うくなってきたようです。そうになると、農業の生産性は世界中で低下し、生物の多様性も減ってしまうと見られています。

また、気候の「極端現象」の増加も紹介されました。米国中西部の干ばつ、オーストラリア東部の降雨量の激減など極端な気候変動で、小麦の収量が減り、日本ではパンやうどんの値上がりにつながりました。京都ではソメイヨシノの開花が1953年〜2013年までの60年間で約1週間も早まり、紅葉の美しいイロハカエデは、見ごろの紅葉日が1週間も遅く

なっていることが発表されました。紅葉を楽しみながら、新年の挨拶が交わされる光景も出現しそうです。

ミカンどころの松山では、ミカンの日焼け、実と皮の間に隙間ができる浮皮と言う被害が出ていること。しかし、亜熱帯性のオレンジと温州ミカンの掛け合わせなどの品種改良で、デコポン、せとかといった新しい果物が登場しており、ピンチをチャンスに変える試みも紹介されました。

仙台市では、市内を流れる広瀬川で40年前までは川が凍結し、子どもたちがスケートを楽しんでいたそうです。市内にある五色沼は日本のフィギュアスケート発祥の地と言われますが、今は氷が張ることなどなくなってしまいました。

さらに、東北地方では、2050年ごろから1日100ミリを超える激しい雨が增え、洪水や斜面崩壊といった災害も増えるとの予測が明らかにされました。

横浜会議ではこうした事態への対応策も発表されます。この欄でもあらためて紹介させて頂きますが是非、会議の行方注目して下さい。

一般財団法人 地球・人間環境フォーラム  
環境問題に取り組む公益法人。地球環境問題の科学的調査研究を目的に1990年に設立。  
国立環境研究所・地球環境研究センターの研究サポート、研究成果の普及・啓発などのほか、月刊機関誌「グローバルネット」を発行。